

『稲佐山を下る』

◎登場人物

男

女

稲佐山夜景見学ツアー、バス車内。

男「どうしたの」

女「え」

男「静かじゃない」

女「うん」

男「見て、バスガイドさん。登る時は、あちらをご覧ください。暗くて見えないかもしれませんが、あの辺りが原爆投下中心地、浦上の地です。…あちらをご覧ください。暗くて見えないかもしれませんが、浦上の地にある浦上天主堂です。…って、あんなに説明してたのに、疲れて座ってる」

女「疲れて…」

男「うん」

女「疲れて座ってるんじゃないんじゃない」

男「え」

女「余韻」

男「…ああ、世界新三大夜景。世界の三本だから」

女「綺麗だった」

男「ハートのイルミネーションを探せ探せってバスガイドさん言ってたからさ、触れて良かったね」

女「うん。バスガイドさん、踏んでた」

男「え、なに」

女「バスガイドさん、ハートのイルミネーション踏んでた」

男「なにそれ、たまたまじゃない。暗かったし」

女「あれはね、疲れて座ってるんじゃないじゃなくて軽い批判かもしれない」

男「誰を」

女「ただ、はしゃぐ観光客を」

男「…あなた、はしゃいでた観光客でしょ」

女「それがちょっと恥ずかしいの」

男「楽しんで何が悪いの」

女「グラバー園でも」

男「…ああ、あそこでもハートあったね。あなた、はしゃいでたね」

女「それがちょっと恥ずかしい。…そこまで、大切なものじゃないんだよ、バスガイドさんにとって」

男「え」

女「だって、ハートのイルミネーションを探せっていうのは、お楽しみ感を増やそうとしてるだけじゃない」

男「観光地のひとつのおもてなしだろ」

女「本当は浦上の地をやっぱり知って欲しいわけじゃない」

男「あれで」

女「あれで？」

男「バスガイドして、ご飯食べてる」

女「ご飯を食べるために必要だけど、それよりも浦上の地を知って欲しいわけよ」

男「そうかな」

女「そうだよ」

男「そうかもしれないけど、常にそうじゃないでしょ。ほら、あれ。運転手と他愛もない話で盛り上がってるよ。

今日は今から彼氏とデートなんか？そうなんです、美味しいラーメンを食べに、とか喋ってんだよ」

女「いや、そうかもしれないけど、そうじゃないの」

男「違うの？ラーメン屋の話とかじゃないの」

女「根底。この地で生活してて、完全に忘れて生活することなんてできないの」

男「あれ、長崎出身者みたいな言い方」

女「どこの生まれでも、その土地が染みついてそれは離れないの。愛媛出身でもそれはそれであるの。ない？」

男「ふうん、俺はあんまりない」

女「そっか。…大阪の都会育ちだから」

男「かな」

女「妙なの」

男「妙？」

女「今、妙な気分なの」

男「風邪か？冷えたんじゃない」

女「…稲佐山から下っている、この感覚が妙に感じる」

男「分からない」

女「下から見てたあの建物がある頂上に、登って。今、稲佐山から下ってる。すり鉢の底に戻っていくような」

男「地形？地形がそうさせるんでしょ」

女「そうなのかな」

男「明日はあの辺りに行くよ。ほら、あの辺り、浦上の地。暗くて見えないけど」

女「…整えて行かないとね」

男「なにを」

女「心身を整えていかないと」

男「…バスが着いたら、餃子食べに行くよ」

女「うん、楽しみ。…あの辺り？あの辺りが浦上の地かな」

男「そうじゃないか」

女「暗くて見えない」

窓越しに暗い外を車内から覗き込む、ふたり。